

異文化理解教育で重要な対象文化の「当たり前前提」

—アメリカの公立高校での勤務を通して実感したアメリカ文化の前提—

大西 博人

1. はじめに

異文化理解教育の目標は、「各々の文化的状況の下で有効に対処するために必要とされる、知識、態度、技能を生徒に習得させること」(Banks and Banks, 1993:7)と言えます。人は異文化の下に置かれた場合、自文化の基準に従い、判断し、行動する傾向があります。つまり、日本人は、本能的に日本文化の前提に基づき、状況に対処しようとします。アメリカ文化は、日米関係が政治的、経済的に密接であるため、日本人に一番よく知られていると考えられていますが、この身近であると思われるアメリカ文化においても、どのように対処すればいいかわからない文化的状況は決して少なくありません。

本稿では文化を、価値観を核とし、行動様式や制度・習慣まで含めてやや広義に定義し、異文化の背後に潜む前提の問題を取り上げたいと思います。具体的には、筆者がアメリカ滞在において体験した事象を通し、「アメリカ文化の当たり前前提」のいくつかの事例をご紹介します。

2. 異文化理解に重要な「当たり前前提(Normality Assumption)」

どの文化においても、人々の行動は一貫して共通の前提と価値観によって構成され、それは世代から世代へと受け継がれています。このような「前提」は文化により異なるため、自文化から予測できないものも多くあります。D'Andrade (1984:103)は、これを“normality assumption”(当たり前前提)と呼び、この前提を理解することの重要性を説いています。彼は基本的な文化事象を理解する能力を養うために、コンピュータ・プログラム作成の手法を提案した Schank & Abelson (1977)の説を紹介したうえで、次のようにアメリカのレストランでのスクリプトと関連する質問を用いて、文化的前提を以下のように詳細に説明しています。

Roger went to the restaurant. He ordered *coq au vin*. The waiter was surly and the table was right next to a cash register. Roger left a very small tip.

QUESTIONS: What did Roger eat? To whom did Roger give his order? Where did Roger sit? Did Roger like the restaurant? Who was the tip for?

(通常、注文はウェイターにし、人は注文したものを食べ、テーブルに向かって座り、チップの額でサービスや料理の満足度を示します。ウェイターが不愛想で、テーブルの環境が悪いと、普通は満足できないのです。通常、レジの隣のテーブルは居心地が良くないのです。)

D'Andrade は、異文化内である特定の状況にいる人は、その文化に固有の前提が理解できないため、上記のコンピュータ・プログラムのような前提の確認が必要になると主張しているのです。アメリカのレストランでの前提は、日本人にはよく知られていて問題は起こらないかもしれませんが、アメリカ文化には日本人には意外に思える「当たり前前提」があります。

3. アメリカの高校の勤務で痛感した学校文化に潜む「当たり前前提」

1988年当時の話になりますが、かつて兵庫県と米国ワシントン州との交換高校教師として、シアトル郊外のキング郡にある Vashon Island 高校で、1年間、日本語と日本文化と世界地理を教えたことがありました。西シアトルからフェリーで約20分のこの島は、淡路島の約3分の1の面積で人口1万人弱の、緑の多い避暑地的なところでした。住民たちは都会シアトルの悪弊が流入するという理由で、長年にわたり橋の建設に反対してきたため、現在でもカーフェリーとダウンタウン直行通勤定期船に依

存する、橋のないコミュニティーです。また、アメリカでは比較的治安のよいところです。Vashon Island 高校は、3 学年制で全校生徒 300 人余りの小規模校で、平均的なアメリカの公立高校よりもずっとよい評価を受けていました。

この教育学区は小規模であるがゆえに、日本に派遣された社会科教師の代替教師を雇えなかったため、筆者は免許のない社会科の選択科目も教えることになっていました。日本での事前ガイダンスもなかったうえに、ソロでの授業だけでなく、成績評価、職員研修会、出張なども含め、アメリカ人教師と同等の職務を求められました。しかし、このことが幸いして、生徒たちとの毎日の多くのやり取りを通して、アメリカの高校制度や生徒の行動パターンがより理解できたのでした。その後も Vashon Island には数年毎に訪問し、地域の友人たちや高校の元同僚と交流してきました。そのあとに新築された校舎も訪れ、いくつかの授業に参加することで最近の状況も見聞してきています。以下では、筆者が過去において体験した文化的事象を取り上げ、「当たり前の前提」の具体例としてご紹介したいと思います。

3. 1. マスク着用者はアメリカでは「犯罪者」か「伝染病患者」という前提

晩秋の頃、空気が乾燥していて鼻炎ぎみとなったため、マスクをして日本文化の授業に臨みました。授業が始まるやいなや、一番前に座っていたある男子生徒がいきなり、“Is it infectious?”(感染病なのか)と質問してきたので、不意打ちを食いました。マスクをしているのは「伝染病患者」ということなど想定していなかったからでした。アメリカではマスクをしている人は、「犯罪者か伝染病患者だけだ」ということを読んだことを思い出し、まさにこの前提がこの生徒の質問によって確認されたのでした。

アメリカの新聞社で 10 年間働いていた人物の記事(jiji.com)によると、彼がアメリカの新聞社で働き始めた当初、風邪をひいて日本の感覚でマスクをつけて出社したとき、会う人みんなが恐怖の表情を浮かべ、どうしたのかと彼に尋ねたのです。アメリカでは、マスク着用は、よほどの重病か伝染病かという恐怖を与えるると彼は述べています。また、同じ記事内に「アメリカで顔を隠すのは犯罪を連想させる」との記述もあります。

2020 年より新型コロナウイルス感染症がアメリカで拡大しましたが、このような前提があるためか、当初アメリカ人はなかなかマスクをつけませんでした。アメリカでは日本に比べて、男性が「たくましさ」を重視する傾向があり、トランプ大統領が断固としてマスクをつけなかったのも、弱々しく見えるのを嫌がったからだと言われていました。しかし、コロナ禍において世界で最も多くの死者を出したアメリカでは、「アメリカ人はマスクをしなれないものだ」という前提も今後は変わっていくかもしれません。

3. 2. 日本では普及していない「スクールバス制度」に伴う道路交通法の前提

アメリカには、日本では普及していない伝統的なスクールバス制度があり、例の黄色いバスが小学生から高校生までを登下校時に送り迎えしています。ある日の放課後、授業後に車で帰宅していた途中で、前方にスクールバスが停車し、子供たちが下車していました。対向車がなかったのでバスの周囲に注意を払い、そのバスを追い越しました。その瞬間、バスからの視線を感じたような気がしました。翌日、同僚にこのことを話すと、路上でスクールバスが赤い八角形の板に白文字で「STOP」と書いてあるサインを出して停車しているときは、両方向とも後続車は停車し待機しなければならない、と彼は教えてくれました。児童生徒という弱者を守るための交通規則でした。

その後しばらくして午後小学校で会議があり、それが終わり帰宅するため、車のエンジンをかけました。すると中年女性が血相を変えて駆け寄り、人差し指で空を切りながら叫び、“You can't do this!”という部分だけが聞き取れました。ふと見まわすと、スクールバスが校庭に停止していて、児童の下校時間となっていました。前回の経験から、スクールバスが校庭内にいると、車を移動することができないのだと理解しました。日本には「スクールバス制度」が普及していないため、スクールバスに関するこの当たり前の前提に思い至らなかったのです。

3. 3. Field trip(社会見学旅行)で再認識した日本の「口内(口中)調味」

日本文化の授業で、スクールバスを予約し、シアトル市のダウンタウンで日本食を食べたあと、多く

の日本製品を揃える大型スーパーを見学する日帰り旅行に受講生たちを連れていきました。日本食レストラン Bush Garden に、10ドルで代表的ないくつもの日本料理を一切れずつワンプレートにしたランチを予約しました。ランチにはみそ汁と白ご飯をつけてもらいました。生徒たちが食べているのを観察していると、すべての生徒は白ご飯に醤油やケチャップなどをかけて食べていました。そのとき、「アメリカではすべての料理には味が付いているべき」という前提に気づきました。日本人は味付けのない白いご飯を口の中で咀嚼しながら、他のおかずと組み合わせることで味を調和させるという「口内調味」のため、白ご飯は味付けがなくても食べられるのです。

口内調味について玉村(2010:66)は「いっしょ食い」と呼び、「口の中に入れた食物の咀嚼を途中で止めたまま、口を半開きにしておいてそのまま次の食物や液体を放り込むのは、けっこう微妙な運動神経を必要とする作業です。(中略)だから、アメリカ人は、白いごはんを食べるとき、かならず醤油をかけます。ピラフやチャーハンならよいが、味がない白いごはんはそのまま食べることができないからです。」と述べています。これは日本人が世界に誇る特技で、アメリカではありえないのです。

3.4. 大学入学条件にも評価される高校生の労働経験

新学期が始まった9月の初め、放課後に近くのドラッグストアに立ち寄ったとき、白い制服を身に着けた店員を見かけました。世界地理の授業を受けている男子生徒でした。当校では、放課後や週末にアルバイトをする生徒は5割ほどのことでした。日本の高校では、アルバイトは経済的に必要があるとする親からの申し出がある場合に限り、勉学に支障がないという条件で学校が許可していることが多いようです。労働ではなく勉学に集中することが日本の高校生に対して期待されていますが、アメリカの高校では「高校生の労働経験は重要である」という前提が存在します。実際、アメリカの大学の入学審査では、労働経験を含む課外活動も評価の対象になっています。

アメリカの高校生は、大学生活のためにアルバイトで貯蓄する機会が多いと言われています。アルバイトは自分のほしいものを自分の力で得る、すなわ

ち自立に向けての第一歩として推奨される傾向が強く、好意的に見られているようです。アメリカでは、子どもは親から大学の費用を払ってもらわないよう努めるが、自分の子どもの費用を用意しなくてもよいという「前提」が、高校生の労働経験とも関連していると思われます。

4. まとめ

日本人には身近であると思われるアメリカにおいても、どのように対処すればいいかわからない具体的な状況が少なくありません。それは、アメリカ人には意識すらされていないアメリカ文化の下での当然の前提が、日本人には思いもつかないためです。

本稿では、筆者が勤務したアメリカの公立高校での具体的な体験を通して、アメリカ文化の「当たり前」についてご紹介しました。授業中における生徒の意外な質問や、スクールバスなどの教育制度、高校生の労働経験の意義などすべては、アメリカ文化の前提の下での具体的な表出で、日本文化とは異なるものでした。異文化理解教育では、このような当たりの前提を認識していることが求められると思います。

参考文献

- Banks, James A., and Cherry A. McGee Banks. (1993). *Multicultural Education: Issues and Perspectives*. Boston: Allyn and Bacon.
- D'Andrade, Roy G. (1984). "Cultural Meaning Systems." *Culture Theory*. Ed. Richard A. Shweder and Robert A. LeVine. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schank, Roger, and Robert Abelson. (1977). *Scripts, Plans, Goals, and Understanding*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 時事通信社(2020).「マスク戦争勃発?なぜアメリカ人はマスクを嫌がるのか」
<https://www.jiji.com/jc/v4?id=usashimura200680002>
- 玉村豊男(2010).『食卓は学校である』集英社新書
 (兵庫県立神戸高塚高等学校 非常勤講師)